

南から北へ——南琉球諸語の視点から見た北琉球諸語の韻律体系

五十嵐陽介・セリックケナン

(国立国語研究所)

1. はじめに

過去 10 数年、南琉球諸語、とりわけ宮古語・八重山語の韻律体系の研究が進み、両者に共通する特徴が次第に明らかになってきた（松森 2010, 2013, 2016; Igarashi et al. 2011, 2018; 五十嵐他 2012; 松森・五十嵐 2014; 五十嵐 2015, 2016; 新田 2023b; セリック 2020, 2021, 2023; セリック・麻生 2023ab）。先行研究は、本土日本語を対象に発展してきた記述枠組みでは、宮古語・八重山語の韻律体系を十分に捉えきれないことを繰り返し指摘してきた（五十嵐 2015, 2016, 2025; 松森 2016, 2025b など）。

南琉球諸語の韻律体系の特殊性を強調することは、南琉球に共通する特徴が北琉球には見られないかのような印象を与える。しかしながら、南北琉球諸語の韻律体系を対照した研究は必ずしも十分ではない。したがって、両者の共通点・相違点は本質的に未解明のままである。

本稿は、南琉球諸語の韻律体系が北琉球諸語の体系と多くの点で共通することを示し、南北琉球諸語に共通する性質と方言間差を韻律理論の標準装置で形式化することを目的とする。

2. 南北琉球諸語の韻律体系の共通性

本稿では、琉球祖語に再建される 3 つの調類（tone class）を共時的に保持する体系をもつ南北琉球諸語を検討対象とする。具体的には、南琉球諸語からは宮古語多良間方言（沖縄県・多良間島）を、北琉球諸語からは奄美語亀津方言（鹿児島県・徳之島）、奄美語与論東区方言（鹿児島県・与論島）、奄美語沖永良部国頭方言（鹿児島県・沖永良部島）、沖縄語伊平屋方言（沖縄県・伊平屋島）を検討する。

琉球祖語には A 類・B 類・C 類の 3 種類の調類が再建されており（服部 1958 ; 松森 1998）、これらを保持する体系をもつ現代変種の共時的な調類は、祖語の A 類・B 類・C 類との対応に基づいて分類できる。本稿では、祖語の調類は大文字（A 類・B 類・C 類）で、その反映（reflex）として区別される共時的調類に属する語のピッチパターンは小文字（a 型・b 型・c 型）で表記する。

宮古語・八重山語の近年の研究は、祖語の類を保持する体系に共通する性質として (1) を指摘している。ここで「卓立（prominence）」とは、ピッチの上昇または下降として音声的に実現される韻律的な顕著性を指す。

(1) a. b 型と c 型は、卓立の位置で対立する。

b. b 型の卓立は、c 型よりも後方に位置する。

c. b 型の卓立が語彙語（lexical word）の外側に現れる環境が必ず存在する。

本稿では、b 型と c 型の区別のように語彙的対立に関与する卓立を、語彙的トーン (lexical tone) の実現とみなし、語彙的トーンが付与される位置の指定をアクセント (accent) と定義する。したがって (1) は (2) のように言い換えられる。

- (2) a. 位置の対立 : b 型と c 型はアクセントの位置で対立する。
 b. 相対的位置関係 : b 型のアクセントは c 型より後方に位置する。
 c. b 型におけるアクセントの外在化 : b 型のアクセントが語彙語の外側に現れる環境が必ず存在する。

a 型と他の型との対立の性質について論じることは本稿の射程外とする。a 型の由来である琉球祖語の A 類はアクセントを欠く類 (unaccented class) として再建できる見通しを筆者らは持っており、多くの共時的体系においても a 型はアクセントを欠くと分析可能であると考えられるが、この見解の検証は今後の課題である。

南琉球諸語に (2) の性質が観察されることを、宮古語多良間方言 (五十嵐 2015; 青井 2016) を例に取って確認しよう。(3) は多良間方言における b 型と c 型の実現形である。以降、「r」と「l」はそれぞれピッチの上昇と下降を、「n」はモーラ内部のピッチ下降を表す。

(3) 多良間方言の実現形

b 型	c 型
a. ja ^r ma=ma ^l i...	b. ^r na ^l bi=mai...
山=も	鍋=も
c. ma ^r ffa=kara ^l =du...	d. ma ^r ka ^l =kara=du...
枕=から=焦点	お椀=から=焦点
e. ta ^r ku=nu=gami ^l =du...	f. fu ^r ni ^l =nu=gami=du...
蛸=主格=だけ=焦点	船=主格=だけ=焦点
g. ja ^r ma=ka ^l ra=mai...	h. ^r u ^l ja=kara=mai...
親=から=も	親=から=も

ピッチの下降位置に着目すると、同一環境では、下降は常に c 型より b 型のほうがより後方に現れることがわかる。多良間方言の語彙的トーンは L であり (Celik and Aoi forthcoming)、(3) の環境においては H が先行することによって下降が実現される。この L が結びつく位置をアクセント位置とみなし、それをアポストロフィで表すと、(3) におけるアクセント位置は (4) のように表せる。

(4) 多良間方言のアクセント位置

b 型	c 型
a. jama=mai'...	b. nabi'=mai...
c. maffa=kara=du'...	d. maka['=kara=du...
e. taku=nu=gami=du'...	f. funi=nu'=gami=du...
g. jama=kara'=mai	h. uja'=kara=mai

(4) から明らかなように、b 型と c 型はアクセントの位置で対立し（位置の対立; 2a）、アクセントは c 型より b 型のほうがより後方に現れる（相対的位置関係; 2b）。(4) の環境では、b 型のアクセントは常に語彙語の外側に現れており、「b 型におけるアクセントの外在化」(2c) も認められる。c 型のアクセントは、直後に 1 モーラ接語を伴う (4f) を除いて、語彙語内部に現れる。

(2) で要約した特徴は、アクセントに結びつく語彙的トーンの値自体 (L/H 等) は方言ごとに異なりうるものの、他の南琉球諸語、たとえば宮古語水納島方言（セリック・大浦 2023）、池間方言（新田 2023b ; Igarashi forthcoming）、与那覇方言（松森 2013、新田 2023a）、八重山語鳩間方言（セリック 2023）、小浜方言（Celik and Aso forthcoming）、黒島方言（松森 2016; 五十嵐他 2025）にも共通して見られる。

筆者らの知る限り先行研究で明示的に指摘されてこなかったが、祖語の類を保持する体系を有する北琉球諸語の多くも (2) の諸特徴を共有している。たしかに少数の変種、たとえば奄美語湯湾方言（Niinaga forthcoming）では、b 型と c 型のアクセントの相対的位置が逆転する。しかし、このような体系は、アクセント位置に先行する余剰的な H の発達——いわゆる語頭隆起による重起伏化（金田一 1954）——と、アクセント位置の通時的後方移動——いわゆる山の後退（金田一 1954）——に由来する二次的発達の結果と解釈しうる。同様に、沖縄語金武方言（松森 2025a）や今帰仁方言（Lawrence 2016）など、b 型と c 型の対立を単純な位置の差異として捉えにくい体系も少数ながら存在するが、筆者らはこれを、他方言と比較して多くの改新を経た結果とみなせるという見通しを持っている。

(5) は奄美語亀津方言の b 型・c 型の実現形である（平山他 1967; 平山 1986/2023）。

(5) 亀津方言の実現形

b 型	c 型
a. a ¹ sa ¹¹ 朝	b. ¹ φu ¹ ni 船
c. a ¹ sa ¹ =nu 朝=主格	d. ¹ φu ¹ ni=nu 船=主格
e. asa= ¹ ka ¹ ra 朝=から	f. ¹ φu ¹ ni=kara 船=から

ピッチの下降位置に着目すると、同一環境では常に c 型より b 型のほうがより後方に置かれることがわかる。下降 (HL) の H を語彙的トーンとみなし、アクセントに H が結びつく と解釈すれば、(5) におけるアクセント位置は、アポストロフィを用いて、(6) のように表せる。

(6) 亀津方言のアクセント位置

b 型	c 型
a. asa'	b. $\phi u'ni$
c. asa'=nu	d. $\phi u'ni=nu$
e. asa=ka'ra	f. $\phi u'ni=kara$

(6) から、亀津方言は「位置の対立」(2a) と「相対的位置関係」(2b) を南琉球諸語と共有することが確認できる。また、c 型ではアクセントが常に語彙語内部に固定される一方、b 型では 2 モーラ接語が付く場合に (6e) アクセントが接語へ外在化する。したがって、亀津方言も「b 型におけるアクセントの外在化」(2c) が観察される。

(7) は奄美語・与論東区方言の b 型・c 型の実現形である (上野 1999)。

(7) 与論東区方言の実現形

b 型	c 型
a. $\phi una^{\text{H}}gu$ 女	b. $ha^{\text{H}}tana$ 刀
c. $\phi una^{\text{H}}gu=nu$ 女=主格	d. $ha^{\text{H}}tana=nu$ 刀=主格
e. $\phi unagu^{\text{H}}kara$ 女=から	f. $ha^{\text{H}}tana=kara$ 刀=から

ピッチの上昇位置に着目すると、同一環境では上昇位置は一貫して c 型より b 型のほうがより後方に現れることがわかる。上昇 (LH) の H を語彙的トーンとみなし、アクセントに H が結びつく——いわゆる「昇り核」(上野 1989)——と解釈すれば、(7) におけるアクセント位置は、アポストロフィを用いて、(8) のように表せる。

(8) 与論東区方言のアクセント位置

- | b 型 | c 型 |
|-----------------------|-------------------|
| a. $\phi unagu'$ | b. $hata'na$ |
| c. $\phi unagu'=nu$ | d. $hata'na=nu$ |
| e. $\phi unagu=ka'ra$ | f. $hata'na=kara$ |

与論東区方言も「位置の対立」(2a)と「相対的位置関係」(2b)を共有する。亀津方言と同様に、c 型のアクセントは常に語彙語内部に固定されるのに対し、b 型のアクセントは2 モーラ接語が付く場合に接語に移動する。したがって、与論東区方言も「b 型におけるアクセントの外在化」(2c)が観察される。

(9) は沖縄語・伊平屋方言の b 型・c 型の実現形である (Carlino forthcoming)。

(9) 伊平屋方言の実現形

- | b 型 | c 型 |
|--|--|
| a. $jamatu^{\text{f}}u$
本土 | b. $wara^{\text{f}}bi$
子供 |
| c. $jamatu=^{\text{f}}ga$
本土=主格 | d. $wara^{\text{f}}bi=ga$
子供=主格 |
| e. $jamatu=ka^{\text{f}}ra$
本土=から | f. $wara^{\text{f}}bi=kara$
子供=から |
| g. $jamatu=ka^{\text{f}}ra=nu$
本土=から=属格 | h. $wara^{\text{f}}bi=kara=nu$
子供=から=属格 |

上昇位置に着目すると、同一環境では常に c 型より b 型のほうがより後方に置かれる。上昇 (LH) の H を語彙のトーンとし、アクセントに H が結びつく (「昇り核」) とみなせば、(9) におけるアクセント位置は、アポストロフィを用いて (10) のように表せる。

(10) 伊平屋方言のアクセント位置

- | b 型 | c 型 |
|----------------------|----------------------|
| a. $jamatuu'$ | b. $warabi'$ |
| c. $jamatu=ga'$ | d. $warabi'=ga$ |
| e. $jamatu=kara'$ | f. $warabi'=kara$ |
| g. $jamatu=kara'=nu$ | h. $warabi'=kara=nu$ |

伊平屋方言も「位置の対立」(2a)と「相対的位置関係」(2b)を共有する。また、伊平屋方言でも、c 型のアクセントは常に語彙語内部に固定される一方、b 型ではアクセントが接語へ移動

する。ただし亀津方言・与論東区方言と異なり、接語の長さにかかわらず**b**型のアクセントは必ず語彙語の直後の接語に移動する。したがって、外在化の生起環境は伊平屋方言のほうが広い。いずれにせよ、伊平屋方言にも「**b**型におけるアクセントの外在化」(2c)が観察される。

(11) は奄美語沖永良部国頭方言の**b**型・**c**型の実現形である (Yokoyama forthcoming)。

(11) 沖永良部国頭方言の実現形

b 型	c 型
a. 'haga ¹ mi ¹ i	b. 'hu ¹ ta ¹ bi ¹
鏡	今年
c. 'haga ¹ mi= ¹ nu	d. 'hu ¹ ta ¹ bi ¹ =nu
鏡=主格	今年=主格
e. 'hagami ¹ =ka ¹ ra	f. 'hu ¹ ta ¹ bi ¹ =kara
鏡=から	今年=から
g. 'hagami ¹ =ka ¹ ra ¹ =mu	h. 'hu ¹ ta ¹ bi ¹ =kara=mu
鏡=から=も	今年=から=も

この方言は上昇に先行して H が現れる点で伊平屋方言と異なるが、その他の点では酷似する。上昇 (LH) の H を語彙的トーンとみなし、アクセントに H が結びつく (「昇り核」) と解釈すれば、(11) におけるアクセント位置は、アポストロフィを用いて (12) のように表せる。

(12) 沖永良部国頭方言のアクセント位置

b 型	c 型
a. hagami ¹ '	b. hutabi ¹ '
c. hagami=nu ¹ '	d. hutabi ¹ '=nu
e. hagami=kara ¹ '	f. hutabi ¹ '=kara
g. hagami=kara ¹ '=mu	h. hutabi ¹ '=kara=mu

上昇位置は常に **c** 型より **b** 型がより後方に位置する。また、**c** 型のアクセントは常に語彙語内部に固定される点、接語の長さにかかわらず **b** 型のアクセントが必ず語彙語の直後の接語に移動する点も伊平屋方言と同様である。したがって、沖永良部国頭方言も「位置の対立」(2a)と「相対的位置関係」(2b)、および「**b**型におけるアクセントの外在化」(2c)を共有する。

以上のように、(2) の特徴は南琉球諸語と北琉球諸語とに広く共有される。(2) の諸特徴のうち、とりわけ説明を要するのは「**b**型のアクセントの外在化」(2c)である。**c**型のアクセントは——本節で扱った方言では多良間方言を除き——語彙語内部に固定される。一方、**b**型では、接語が後続する環境で (方言により一律に、あるいは特定条件下で) アクセントが語彙語の外側

に移動する。このことは、アクセント位置を計算する領域 (domain) が b 型と c 型で異なることを示唆する。その領域は、第一次近似として、(13) のように一般化できる。

(13) b 型と c 型のアクセント位置計算に関わる領域 (第一次近似)

a. b 型 : 〈語彙語 + 接語〉を基本とする。

b. c 型 : 語彙語を基本とする。

言うまでもなく、(13) はさらなる精密化が必要である。c 型では語彙語が基本領域となるとしているが、多良間方言では 1 モーラ接語が直後に付くと外在化が生じるので、これを説明しなければならない。b 型では〈語彙語 + 接語〉が基本領域となるとしているが、亀津方言や与論東区方言では 1 モーラ接語が直後に付く場合、アクセントが語彙語内にとどまるので、これを説明しなければならない。さらに、〈語彙語 + 接語〉という単位の厳密な定義も課題である。たとえば伊平屋方言や沖永良部国頭方言では、接語が 1 つの場合と 2 つの場合で b 型のアクセント位置は変わらず第 1 接語に留まる。この事実は、問題の領域を〈語彙語 + 任意個の接語〉、すなわち「文節」とみなし、文節右端を基準にアクセント位置を計算する見解が妥当でないことを示す。したがって、語彙語にも文節にも対応しない単位が想定されるが、この単位が韻律階層 (prosodic hierarchy) にどのように位置づけられるかを検討する必要がある。

次節では、南北琉球諸語に共通する性質と方言間差を統一的に示すため、本節で観察したアクセント配置を韻律理論の標準装置で形式化する。

3. 理論化

3.1 韻律階層

本稿では、韻律階層として (14) を仮定する。

(14) 韻律階層

$$\mu < \sigma < \omega < \varphi$$

(μ : モーラ; σ : 音節; ω : 韻律語; φ : 韻律句)

本稿ではフット (Ft) は韻律階層の構成素としては導入しない。3.4 節で述べるとおり、本稿は韻律階層を参照して定まるアクセント計算の領域 D を設定し、 Ft はこの D の内部にあるモーラ列を括る区間指定 (括弧 $\langle \dots \rangle$) として実装する。韻律階層とは別に、アクセント／強勢の計算のための表示 (metrical grid や metrical tree など) を設ける記述は、Lieberman & Prince (1977) 以来の標準的枠組みに沿う (cf. Halle & Vergnaud 1987; Hayes 1995)。

本稿は Itô and Mester (2009, 2012) に従い、韻律範疇が再帰を許すことを前提とする。ここで韻律的再帰 (prosodic recursion) とは、任意の韻律範疇 κ が、同一範疇 κ を支配／被支配し得る構造を指す。Itô and Mester (2009, 2012) に従い、 κ を下位に支配しない κ を κ の最小投射 (minimal

projection) と定義し、上位の κ に支配されない κ を κ の最大投射 (maximal projection) と定義する。本稿ではそれぞれ、 $\kappa^{\min}$ 、 $\kappa^{\max}$ と表記する。再帰が生じない場合は、同一範疇の上下関係が存在しないため、各 κ は定義により $\kappa^{\min}$ かつ $\kappa^{\max}$ である。

3.2 韻律語 (ω)

ω は、語彙形態素および接語が写像 (prosodic mapping) される韻律範疇である。この範疇は、松森・五十嵐 (2014)、五十嵐 (2015, 2016)、松森 (2016) など南琉球諸語の記述に用いられてきたが、本稿では北琉球諸語を含む共通の枠組みを構築するために、この韻律範疇を精密に定義する。

本稿では、語彙的ホスト (lexical host) を含む ω (ホスト対応 ω) と、それ以外の ω を区別する。語彙的ホストとは、語彙語の左端に位置する語彙形態素を指す。単純語では語彙的ホストは語彙語に一致し、複合語では左端の語根が語彙的ホストとなる。宮古語・八重山語では、複合語の第2語根以降は接語と同じ形で韻律に写像されることが明らかになっている。しかし北琉球諸語における複合語の韻律現象は不明のところが多い。したがって、本稿では考察対象を単純語に限定する。そのため、本稿では語彙的ホストは語彙語そのものに一致する。

本稿では、語彙的ホストに対応する ω の最小／最大投射を次のように定める。ホスト対応の ω の最小投射 $\omega^{\min}(\text{host})$ は、語彙的ホストを含み、 ω を支配しない ω と定義する。ホスト対応の ω の最大投射 $\omega^{\max}(\text{host})$ は、 $\omega^{\min}(\text{host})$ を含み、 ω に支配されない ω と定義する。

接語の韻律への写像は方言ごとに異なる。これがアクセント位置の方言差の一因となる。具体的には、すべての接語が独立の ω に写像される方言がある一方で、接語の長さ (モーラ数) に応じて、独立の ω に写像されるものとされないものに分かれる方言もある。後者のタイプでは、接語が2モーラ以上のときに限って独立の ω に写像され、1モーラの接語は独立の ω を形成しない。本稿ではこの一般化を ω の最小性 (ω -minimality) として述べる (Hayes 1995; Itô 1990)。

ω -minimality は普遍的な固定値ではなく方言パラメータである。本稿の対象では、宮古語・八重山語の体系では ω -minimality が課されるが、表1に示すように、本稿が対象とする北琉球諸語では課されず、1モーラの ω が許される。

表1 ω の最小性 (ω -minimality) の有無

ω -minimality		
北琉球	亀津	
	与論東区	
	伊平屋	
	沖永良部国頭	
南琉球	多良間	✓

独立の ω に写像されなかった接語は、 ω レベルの完全包含 (exhaustivity) に従い、隣接する ω に融合 (prosodic incorporation) され、取り残されることはない。本稿が対象とする接語はいずれも後接語 (enclitic) であるので、独立の ω を形成しない接語は、直前の ω に融合する。

語彙的ホストと接語が ω に写像された後、ホスト対応の $\omega^{\min}(\text{host})$ の直後に ω が存在する場合には、 $\omega^{\min}(\text{host})$ とその最隣接の $\omega^{\min}$ が韻律的接合 (prosodic adjunction) (Itô and Mester 2009, 2012) によって上位の ω ($\omega^{\max}(\text{host})$) として再帰的にまとめられる。

本稿が対象とする琉球諸語すべてにおいて、再帰の深さは $\omega^{\min}(\text{host})$ と右隣の独立の $\omega^{\min}$ を含む一段にとどまる。すなわち再帰的な接合はホスト対応の $\omega^{\min}(\text{host})$ に最隣接の ω にのみ生じ、それ以降の ω には生じない。本土日本語の鹿児島方言などの、アクセント位置の計算領域が文節であると考えられてきた体系 (Kubozono 2015) では、 ω の再帰的接合がほぼ無制限 (unbounded) に行われると考えられるが、そのような体系は、本稿が対象とする琉球諸語 5 方言に関する限り存在しない。

再帰的接合が生じない ω 、すなわち $\omega^{\max}(\text{host})$ に含まれない残余の ω は、上位の φ の直下に並置されるとみなす。

以上から、例えば伊平屋方言の *jamatu=maði=nu* は、この方言では接語は必ず ω に写像されるので (表 1)、図 1 のような韻律構造に写像される。*jamatu* を含む $\omega^{\min}(\text{host})$ と、その直後に位置する *=maði* を含む $\omega^{\min}$ は、再帰的接合によって $\omega^{\max}(\text{host})$ を形成する。

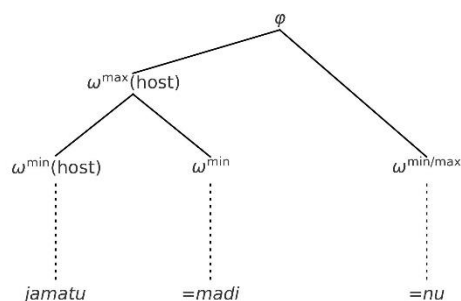


図 1 伊平屋方言の *jamatu=maði=nu* 「本土までの」の韻律構造

一方、多良間方言では、接語が ω に写像されるか否かはモーラ数に依存する (表 1; 五十嵐 2015)。1 モーラ接語は ω に写像されず直前の ω に融合し、2 モーラ以上の接語は独立の ω に写像される。したがって *taku=nu=gami=du* は図 2 の韻律構造に写像される。このとき、語彙的ホスト *taku* と 2 モーラ接語 *=gami* はそれぞれ独立の ω に写像されるが、1 モーラ接語 *=nu* と *=du* は ω に写像されず、それぞれ直前の ω (前者は *taku* を含む ω 、後者は *=gami* を含む ω) に融合する。*taku=nu* を含む $\omega^{\min}(\text{host})$ と、その直後に位置する *=gami=du* を含む $\omega^{\min}$ は、再帰的接合によって $\omega^{\max}(\text{host})$ を形成する。

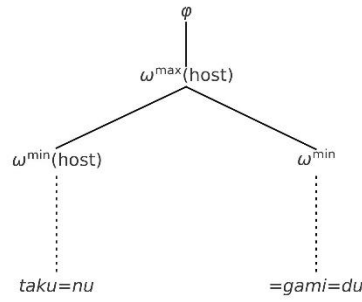


図2 多良間方言の *taku=nu=gami=du* 「蛸までも」の韻律構造

多良間方言の *jama=kara=mai* は、接語がすべて2モーラ以上であるために、それぞれ ω に写像され、図3のような韻律構造が得られる。*jama* を含む $\omega^{\min}(\text{host})$ と、その直後に位置する *=kara* を含む $\omega^{\min}$ は、再帰的接合によって $\omega^{\max}(\text{host})$ を形成する。

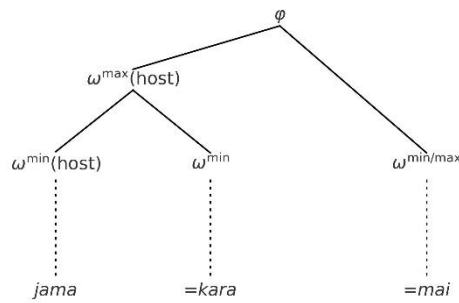


図3 多良間方言の *jama=kara=mai* 「山からも」の韻律構造

3.3 アクセント位置の計算領域

本稿は、b型とc型のアクセント位置の対立を、アクセント位置の計算領域 (D) の違いと、 Ft の類型に帰する。この計算領域 D は、韻律階層を参照して形成される表示であり、韻律階層の構成素をなさない。計算領域 D は方言によらず共通であるが、 Ft の類型は方言ごとのパラメータによる。 Ft の類型は3.4節で論じる。

D について本稿は、方言差によらず、b型は $\omega^{\max}(\text{host})$ であり、c型は $\omega^{\min}(\text{host})$ であるとみなす(15)。

(15) アクセント位置の計算領域 D (方言に共通)

a. b 型 $\omega^{\max}(\text{host})$

b. c 型 $\omega^{\min}(\text{host})$

第2節で論じた「b型におけるアクセントの外在化」(2c)は、この計算領域の選択の差として統一的に説明できる。b型において D となる $\omega^{\max}(\text{host})$ は、語彙的ホストに後続する形態素（本稿では常に接語）を取り込むことがあるので（再帰的接合）、 D は語彙語より大きな単位となりうる。これがb型のアクセントの外在化の要件となる。同時にb型における D は、語彙的ホストに後続する接語をすべて含むわけではないので、 D は文節より小さな単位となりうる。対照的に、c型において D となる $\omega^{\min}(\text{host})$ は、 ω -minimalityが課されない限り、語彙的ホストのみから形成されるので、単純語に関する限り語彙語に一致する。したがってc型単純語においては、 ω -minimalityによって直後の接語が $\omega^{\min}(\text{host})$ に融合しない限り、アクセントの外在化は生じない。

伊平屋方言のb型 $\text{jamatu}=\text{madi}=\text{mu}$ と c型 $\text{warabi}=\text{madi}=\text{mu}$ を例にとろう。前者は jamatu が $\omega^{\min}(\text{host})$ を、 $\text{jamatu}=\text{madi}$ が $\omega^{\max}(\text{host})$ を与え、後者は warabi が $\omega^{\min}(\text{host})$ を、 $\text{warabi}=\text{madi}$ が $\omega^{\max}(\text{host})$ を与える。したがって D は (16) のようになる。角括弧は D の境界を表す。

(16) 伊平屋方言における D

a. b型 $\text{jamatu}=\text{madi}=\text{mu}$ $\rightarrow$ $[\text{jamatu}=\text{madi}]=\text{mu}$

b. c型 $\text{warabi}=\text{madi}=\text{mu}$ $\rightarrow$ $[\text{warabi}]=\text{madi}=\text{mu}$

同様に多良間方言では、b型 $\text{taku}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}$ と c型 $\text{funi}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}$ について、 $\text{taku}=\text{nu}$ と $\text{funi}=\text{nu}$ が $\omega^{\min}(\text{host})$ を、 $\text{taku}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}$ と $\text{funi}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}$ が $\omega^{\max}(\text{host})$ を与える。よって D は (17) のように与えられる。

(17) 多良間方言における D

a. b型 $\text{taku}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}$ $\rightarrow$ $[\text{taku}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}]$

b. c型 $\text{funi}=\text{nu}=\text{gami}=\text{du}$ $\rightarrow$ $[\text{funi}=\text{nu}]=\text{gami}=\text{du}$

多良間方言のb型 $\text{jama}=\text{kara}=\text{mai}$ と c型 $\text{uja}=\text{kara}=\text{mai}$ では、 jama と uja が $\omega^{\min}(\text{host})$ を、 $\text{jama}=\text{kara}$ と $\text{uja}=\text{kara}$ が $\omega^{\max}(\text{host})$ を与える。よって D は (18) のように与えられる。

(18) 多良間方言における D

a. b型 $\text{jama}=\text{kara}=\text{mai}$ $\rightarrow$ $[\text{jama}=\text{kara}]=\text{mai}$

b. c型 $\text{uja}=\text{kara}=\text{mai}$ $\rightarrow$ $[\text{uja}]=\text{kara}=\text{mai}$

(17-18) は南琉球諸語の韻律体系に関する先行研究において、「b型は2番目の ω に、c型は1番目の ω にアクセントが付与される」（五十嵐 2015; 松森 2016; セリック 2020; 新田 2023b など）と記述されてきた事実を、より精密な形でモデル化したものである。この理論的モデルは、

南琉球諸語だけでなく、北琉球諸語のアクセント配置をアクセント位置の計算領域の違いとして統一的に扱うことができる。

3.4 フット (Ft)

本稿では、アクセントを *Ft* の主要部 (head) として実装する。これは、強勢をフット主要部とみなすという Metrical Theory における標準的前提 (Lieberman and Prince 1977; Halle and Vergnaud 1987; Hayes 1995) を、琉球諸語の韻律体系に拡張したものである。

Ft は構成素ノードではなく区間指定として与えられ、*D* (b 型は $\omega^{\max}(\text{host})$ 、c 型は $\omega^{\min}(\text{host})$) の内部で、(19) に示す最小の仮定に従い一意に決定する。

(19) フットの定義と配置

- a. 領域内限定： *Ft* は *D* の内部にのみ構築される。
- b. 2 モーラ性 (binarity)： *Ft* は 2 モーラからなる。
- c. 右端整列 (right alignment)： *Ft* は *D* の右端に整列する。
- d. 非反復 (non-iterativity)： *Ft* は *D* に 1 つだけ配置される。
- e. *Ft* 類型パラメータ： *Ft* は iamb 型 (弱強型) または trochee 型 (強弱型) として構築され、調類 (b 型・c 型) ごとに指定される (iamb は右成員が、trochee は左成員が主要部)。

(19) は、2 モーラ性・右端整列・非反復という標準的な選択肢 (Halle and Vergnaud 1987; Hayes 1995) の組み合わせであり、アドホックな仮定を導入することなく、b 型・c 型の領域の違いと各方言の *Ft* 類型でアクセント位置を一義的に決定できる。ただし必要に応じて、単位末の韻律外性 (extrametricality) を先に適用してから (19) を評価する。

Ft 類型パラメータは表 2 の形に要約できる。

表 2 *Ft* 類型パラメータ

		Foot type	
		b 型	c 型
北琉球	亀津	iamb	trochee
	与論東区	iamb	trochee
	伊平屋	iamb	iamb
	沖永良部国頭	iamb	iamb
南琉球	多良間	iamb	iamb

亀津方言と与論東区方言のみにおいて、b 型と c 型は *Ft* 類型によっても対立する。方言にかかわらず b 型と c 型は *D* によって対立するので、亀津方言と与論東区方言の体系には余剰性 (redundancy) が認められる。この点は 4 節で論じる。

伊平屋方言の *Ft* 類型は両型ともに iamb なので、(16) の発話は (19) によって (20) のように iambic *Ft* が形成される。

(20) 伊平屋方言における *Ft* 構築

a. b 型 jamatu=madi=mu → [jamatu=<madi'>]=mu

b. c 型 jarabi=madi=mu → [ja<rabi'>]=madi=mu

多良間方言も同様に、*Ft* 類型は両型ともに iamb なので、(17-18) の発話は (19) によって (21) のように弱強型の *Ft* が形成される。

(21) 多良間方言における *Ft* 構築

a. b 型 taku=nu=gami=du → [taku=nu=ga<mi=du'>]

jama=kara=mai [jama=<kara'>]=mai

b. c 型 funi=nu=gami=du → [fu<ni=nu'>]=gami=du

uja=kara=mai [<uja'>]=kara=mai

亀津方言・沖永良部国頭方言については、*Ft* 構築を正しく導出するために韻律外性を導入する必要がある。既述 (6, 8) のとおり、これらの方言の b 型では、単独形および 1 モーラ接語付加形 (=nu) ではアクセントの外在化は生じない一方、2 モーラ接語付加形 (=kara) ではアクセントの外在化が観察される。本稿の枠組みでは、両方言の b 型の計算領域 *D* は語彙語 + 直後の接語から成るため、アクセント自体は *D* の内部で計算される。ただし *D* の右端に対し右端整列 (19c) を課すと、単独形では最終 μ に、接語付加形では次末 μ にアクセントが現れることになり、見かけ上、同一の調類 (b 型) 内で *Ft* 類型が trochee と iamb とに分岐してしまう。

この問題に対し、本稿では非ホスト対応の $\omega^{\min}$ の終末 μ を韻律外とする。これは、終末の σ/μ が韻律操作に対して非可視となる Nonfinality の表れと解釈できる。ただし本稿の Nonfinality は構造的に相対化されており、ホスト対応の $\omega^{\min}(\text{host})$ には適用されず、非ホスト対応の $\omega^{\min}$ にのみ適用される。韻律外性の適用を先行させたうえで、*Ft* は *D* に対し (19) のもとで一貫して決定されるため、b 型=iamb、c 型=trochee という類型パラメータの一貫性が保たれる。亀津方言の (6) のデータに即した *Ft* 構築は (22) のとおりである。韻律外の μ は記号「°」で示す。

(22) 亀津方言における *Ft* 構築

a. b 型	asa	→	[<asa'>]
	asa=nu	→	[<asa'>=nu ^o]
	asa=kara	→	[a<sa=ka'>ra ^o]
b. c 型	funi	→	[<fu'ni>]
	funi=nu	→	[<fu'ni>]=nu
	funi=kara	→	[<fu'ni>]=kara

このように、b 型では iamb、c 型では trochee を保ったまま、1 モーラ接語付加時の非外在化をホスト非対応 $\omega^{\min}$ の最終 μ の韻律外性として統一的に記述できる。

以上の議論を踏まえると、第 2 節で論じた 5 方言のデータにおける *Ft* 構築は表 3 のように要約できる。表 3 から、本稿の枠組みが各方言のアクセント位置を一貫して導出できることが分かる。

表 3 各方言における *Ft* 構築

亀津方言	
b 型	c 型
a ^r sa ^{l1}	「 ϕ u'ni
→[<asa'>]	→[< ϕ u'ni>]
a ^r sa ^l =nu	「 ϕ u'ni=nu
→[<asa'>=nu ^o]	→[< ϕ u'ni>]=nu
asa=「ka ^l ra	「 ϕ u'ni=kara
→[a<sa=ka'>ra ^o]	→[< ϕ u'ni>]=kara
与論東区方言	
b 型	c 型
ϕ una ^r gu	ha ^r tana
→[ϕ u<nagu'>]	→[ha<ta'na>]
ϕ una ^r gu=nu	ha ^r tana=nu
→[ϕ u<nagu'>=nu ^o]	→[ha<ta'na>]=nu
ϕ unagu=「kara	ha ^r tana=kara
→[ϕ una<gu=ka'>ra ^o]	→[ha<ta'na>]=kara
伊平屋方言	
b 型	c 型
jamatu ^r u	wara ^r bi
→[jama<tuu'>]	→[wa<rabi'>]
jamatu=「ga	wara ^r bi=ga
→[jama<tu=ga'>]	→[wa<rabi'>]=ga
jamatu=ka ^r ra	wara ^r bi=kara
→[jamatu=<kara'>]	→[wa<rabi'>]=kara
jamatu=ka ^r ra=nu	wara ^r bi=kara=nu
→[jamatu=<kara'>]=nu	→[wa<rabi'>]=kara=nu

表3 各方言における Ft 構築（続き）

沖永良部国頭方言	
b 型	c 型
ʼhagaʼmiʼi	ʼhuʼtaʼbiʼ
→[haga<miiʼ>]	→[hu<tabiʼ>]
ʼhagaʼmiʼ=ʼnu	ʼhuʼtaʼbiʼ=nu
→[haga<miʼ=nuʼ>]	→[hu<tabiʼ>]=nu
ʼhagamiʼ=kaʼra	ʼhuʼtaʼbiʼ=kara
→[hagamiʼ=<karaʼ>]	→[hu<tabiʼ>]=kara
ʼhagamiʼ=kaʼraʼ=mu	ʼhuʼtaʼbiʼ=kara=mu
→[hagamiʼ=<karaʼ>]=mu	→[hu<tabiʼ>]=kara=mu
多良間方言	
b 型	c 型
jaʼmaʼmaʼi...	ʼnaʼbiʼ=mai...
→[jamaʼ=<maiʼ>]...	→[<nabiʼ>]=mai
maʼffaʼkaraʼ=du...	maʼkaʼlʼ=kara=du...
→[maffaʼkaʼ<raʼ=duʼ>]...	→[ma<kaʼʼ>]=kara=du
taʼkuʼnuʼgamiʼ=du...	fuʼniʼ=nuʼgamiʼ=du...
→[takuʼnuʼgaʼ<miʼ=duʼ>]...	→[fuʼ<niʼ=nuʼ>]=gamiʼ=du
jaʼmaʼkaʼraʼ=mai...	ʼuʼjaʼ=kara=mai...
→[jamaʼ=<karaʼ>]=mai...	→[<ujaʼ>]=kara=mai

4. 考察

以上のように、本稿は南琉球諸語の韻律体系に観察される（2a）「位置の対立」、（2b）「相対的位置関係」、および「b 型におけるアクセントの外在化」が、北琉球諸語にも共通して観察されることを示した。南琉球諸語の韻律体系は、本土日本語を対象に発達してきた枠組みでは十分に記述できないとしてその「特殊性」が強調されてきたが、南北琉球を体系的に対照することで、両者の間には少なからぬ共通性があることが明らかになった。

特徴（2）が南北琉球列島に広く分布するという事実は、琉球祖語においても（2）を呈する体系が再建可能であることを示唆する。すなわち、祖語の B 類・C 類はアクセントを有する類で、両者がアクセント位置によって対立するという体系である。さらに A 類がアクセントを欠く類として再建できるのであれば、琉球祖語の体系は「アクセント核があるか、あるならどこにあるか」と一般化されてきた体系——東京方言を含む本土日本語の広範な方言に観察される体系——と整合する。この見通しが正しければ、従来「本土と著しく異なる」とされてきた南琉球諸語は、北琉球諸語のみならず本土日本語とも重要な共通性を持つことになる。

一方で、東京方言を含む本土日本語の多くの方言（いわゆる内輪・中輪・外輪式）では、アクセントの外在化は一般的ではない。本稿が対象とした琉球諸語の b 型に等しく見られたアクセントの外在化が琉球祖語にまで遡るかどうかについては、北琉球諸語におけるさらなる精査を要する。

加えて本稿は、南北琉球に共通する性質と方言間差を、韻律理論の標準装置で形式化した。結果は表 4 の通りに要約できる。

表 4 パラメータの要約

		ω -minimality	Foot type		Extrametricality
			b 型	c 型	
北琉球	亀津		iamb	trochee	ω^{min} -final μ
	与論東区		iamb	trochee	ω^{min} -final μ
	伊平屋		iamb	iamb	
	沖永良部国頭		iamb	iamb	
南琉球	多良間	✓	iamb	iamb	

表 4 から、南琉球の多良間方言と北琉球の伊平屋方言・沖永良部国頭方言のアクセント配置の違いは、 ω -minimality の有無——すなわち語彙的ホスト直後の 1 モーラ形態素（本稿では常に接語）が独立の ω を形成できるかどうか——に還元できることが分かる。南北の境界を越えて、両者は顕著な類似性を示す。

本稿はさらに、b 型と c 型の対立が、方言差を超えてアクセント計算の領域の違い（b 型 = $\omega^{max}(\text{host})$ 、c 型 = $\omega^{min}(\text{host})$ ）に帰せられることを主張した。このなかで、亀津方言・与論東区方言では、領域の違いに加えて Ft 類型パラメータ（iamb / trochee）でも対立がある点が注目される。本稿の枠組みが妥当であるなら、この余剰的な二重対立がいかに関与したかを説明することは、琉球祖語の韻律体系再建に資するだろう。本土日本語の多くの方言では、調類対立が計算領域の違いとしては解釈されないうえ、前述の通りアクセントの外在化も一般的ではない。こうした体系が日本列島に広く分布することを踏まえると、計算領域の違いによる調類対立は、琉球側での二次的発達である可能性が高い。したがって、亀津・与論東区に見られる Ft 類型パラメータによる対立の方が、むしろ祖語の特徴の保持である可能性が示唆される。

このように本稿の結果は、南北琉球に共通する特性を明らかにするだけでなく、琉球祖語の韻律体系再建という通時的課題への貢献可能性も含んでいる。

5. 結論

本稿は、南琉球諸語の韻律体系が北琉球諸語と多くの点で共通することを示すとともに、南北琉球に共通する性質と方言間差を韻律理論の標準装置で形式化することを試みた。さらに、南北琉球の体系が本土日本語の韻律体系とも部分的に整合しうることを示唆した。先行研究で強調されてきた南琉球の「特殊性」は、少なくともアクセント位置の計算の観点からは表層的である可能性がある。

もっとも、本稿が扱ったのは南北あわせて 5 方言にすぎない。本稿の示した一般化が琉球諸語全般にどの程度拡張可能かを明らかにすることは今後の課題となる。そのためには北琉球諸語の調査・分析の一層の充実が不可欠である。五十嵐（2025）が指摘するように、北琉球では「語彙語単独」や「語彙語＋接語 1 個」の形だけで調類数を同定できることが多く、この事情が逆説的に広い環境での検証（後接する接語の数や長さを体系的に変化させるパラダイム）の重要性を過小評価させてきた可能性がある。実際、北琉球の先行研究では、この種の体系的パラダイム調査が十分には採用されてこなかった。今後は、南琉球諸語でこの十数年間にわたり進められてきたこの手法を、北琉球諸語にも本格的に適用する必要がある。

参考文献

- 青井隼人（2016）「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント—その特徴と型の中和—」『音声研究』20(3): 66–80.
- Carlino, Salvatore (forthcoming) Iheya. To appear in: Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-prosodic systems in Japonic languages*. Leiden: Brill.
- セリックケナン（2020）「南琉球宮古語史」博士論文、京都大学.
- セリックケナン（2021）「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』13: 215–290.
- セリックケナン（2023）「鳩間方言の韻律体系の見直し：アクセント型の対立数などを巡って」第 258 回 NINJAL サロン, 2023 年 10 月 7 日, 国立国語研究所.
- セリックケナン・大浦辰夫（2023）『みんなふつ語彙集：水納島方言』東京: 国立国語研究所.
- Celik, Kenan and Reiko Aso (forthcoming) Kohama. To appear in: Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-prosodic systems in Japonic languages*. Leiden: Brill.
- Celik, Kenan and Hayato Aoi (forthcoming) Tarama. To appear in: Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-prosodic systems in Japonic languages*. Leiden: Brill.
- Halle, Morris and Jean-Roger Vergnaud (1987) *An essay on stress*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- 服部四郎（1958）「奄美群島の諸方言について—沖縄・先島諸方言との比較」『人類科学』11: 79–99.
- Hayes, Bruce (1995) *Metrical stress theory: Principles and case studies*. Chicago: University of Chicago Press.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』桜楓社.
- 平山輝男（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』東京: 角川書店.
- 平山輝男（2013）『奄美方言基礎語彙の研究』東京: KADOKAWA（平山 1986 のオンデマンド再刊）.
- 五十嵐陽介（2015）「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8: 1–42.
- 五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33–57.
- 五十嵐陽介（2025）「南琉球諸語アクセント研究の現在」『国語と国文学』102(7): 71–80.

- Igarashi, Yosuke (forthcoming) Ikema. To appear in: Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-prosodic systems in Japonic languages*. Leiden: Brill.
- 五十嵐陽介・荻野千砂子・セリックケナン (2025) 「南琉球八重山語黒島方言の単純名詞のアクセント型の数は 2 か 3 か」『国立国語研究所論集』 26: 1–25.
- 五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラールトマ・久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』 16(1): 134–148.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (2011) How many tonal contrasts in Ikema Ryukyuan?. *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS XVII 2011)*: 930–933.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (2018) Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. In: Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal change and neutralization*, 81–128. Berlin: Mouton De Gruyter.
- Itô, Junko (1990) Prosodic Minimality in Japanese. *CLS 26-II: Papers from the Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*: 213–239.
- Itô, Junko and Armin Mester (2009) The extended prosodic word. In: Baris Kabak and Janet Grijzenhout (eds.) *Phonological domains: Universals and Deviations*, pp. 135–194. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Itô, Junko and Armin Mester (2012) Recursive prosodic phrasing in Japanese. In: Toni Borowsky, Shigeto Kawahara, Mariko Sugahara, and Takahito Shinya (eds.) *Prosody matters: Essays in honor of Elisabeth Selkirk*, pp. 280–303. University of Toronto Press.
- 金田一春彦 (1954) 「東西両アクセントのちがいが出来るまで」『文学』 22(8): 849–870.
- Kubozono, Haruo (2015) Japanese dialects and general linguistics. *Journal of the Linguistic Society of Japan* 148: 1–31.
- Lawrence, Wayne P. (2016) Historical Reanalysis in the Nakijin Dialect Noun Accentuation System. *Cahiers de Linguistique Asie Orientale* 45: 1–25.
- Lieberman, Mark and Alan Prince (1977) On Stress and Linguistic Rhythm. *Linguistic Inquiry* 8(2): 249–336.
- 松森晶子 (1998) 「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』 114 : 85–114.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』 上野善道 (監)『日本語研究 12 章』 490–503. 東京：明治書院.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における 3 型アクセント体系の発見—与那覇方言の場合—」『国立国語研究所論集』 6: 67–92.
- 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み」『言語研究』 150: 59–85.
- 松森晶子 (2025a) 「沖縄語金武方言の 3 種の型の韻律特徴とその所属語彙—琉球語の歴史研究の発展を目指して—」『日本女子大学紀要文学部』 74: 83–109.
- 松森晶子 (2025b) 「南琉球八重山語のアクセント研究」『国語と国文学』 102(7): 81–93.

- 松森晶子・五十嵐陽介（2014）「多良間島アクセントの仕組みとその類型論的意義」国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」研究発表会，2014 年 6 月 22 日，神戸大学.
- Niinaga, Yuto (forthcoming) Yuwan. To appear in: Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-prosodic systems in Japonic languages*. Leiden: Brill.
- 新田哲夫（2023a）「南琉球宮古島与那覇方言のアクセント体系と弁別特徴」『日本方言研究会第 116 回研究発表会発表原稿集』
- 新田哲夫（2023b）「動的音韻解釈から見た南琉球宮古語諸方言の三型アクセント体系」『第 167 回日本言語学会大会予稿集』 514–519.
- 上野善道（1984）「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題 第 2 巻 記述的研究篇』 167–209. 東京：明治書院.
- 上野善道（1989）「日本語のアクセント」杉藤美代子（編）『講座日本語と日本語教育(2)日本語の音声・音韻(上)』 178–205. 東京：明治書院.
- 上野善道（1999）「与論東区方言の多型アクセント体系」『国語学』 199: 12–31.
- Yokoyama, Akiko (forthcoming) Okinoerabu. To appear in: Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-prosodic systems in Japonic languages*. Leiden: Brill.